

氷高園子

Illustration
田崎良虎

砂漠の覇者と夜
蜜愛の夜



砂漠の覇者と蜜愛の夜

《立読み版》

氷高 園子

イラスト 田崎 良虎

沙羅の葉が擦れ合う、かすかな音が優しく響く。

噴水の密やかな水音が心地いい。大理石の貼られた川を流れる水は絶えることなく、それを聞く者はここが砂漠の中に建てられた館であるということをおぼえてしまうだろう。

沙羅の葉擦れの音、噴水と川の音、さやぐ風に混ざって、部屋にはばらり、と紙をめくる音が規則正しく続いている。

「……」

革張りのソファに腰を降ろしていたユサファは、本のページをめくる手をゆっくりと止めた。

目は膝の上の本に落としたまま、彼の体がさっと緊張に包まれたのを見て取ることは、仮に彼の目の前でじっと見ている者があつたとしても不可能だつただろう。

それほどに、わずかな動きだつた。ユサファは全身の神経をとがらせ、しかしなお目は本に落としたまま、気配を探る。

人工の川が水を絶やさぬ庭園に面した、窓の向こう。果たしてどうやって入ってきたのやら。侵入してきたかわいらしい子猫は、きっと最大の危険が何なのかを知らない。

ユサファのカンドウーラの下に隠されているのは、銃身一四インチのイスラエル製自動拳銃、IMI
デザートイーグル。セイフテイ安全装置などもよりついてはいない、ひとりで過ごす時間にもいつでもトリガー
ガードに指を添えて握られているそれは、ユサファのものになって以来、その標的を外したことはない。ターゲット
その吐き出した銃弾の数は少ないが、いずれもが標的の眉間に正確に穴を開け、おびただしい血潮を撒
き散らしてきた。

屋敷を取り囲んでいる赤外線、幾重にも張り巡らされた護衛の目、そのいずれをもくぐり抜けてきた
子猫は、油断していることだろう。あとは窓のさん棧をまたぐだけ。一日の仕事を終えてくつろいでいる、
ユサファ・ビン・イスマイル・アブド・アルバドルの命を奪うにはあと一步であることを、確信し
ていることだろう。

カンドウーラの下のデザートイーグルが、撃鉄を起こす金属音を立てた。しかしそれはわずかな、重
なった布の下のでは子鼠の鳴き声よりも小さな音。

「……っ！」

すべてが、同時に起こった。開け放した窓から飛び込んできた、黒ずくめの男。その構えるワルサー
PPKが火を噴いたのと、ユサファの座っていたソファが倒れ、デザートイーグルがその銃口を爆発さ

せたのと。

「ぐ、う……っ！」

呻き声うめが上がる。床に転がり落ちた、黒革の上下をまとった男の血を流す肩に、ユサファの足がかかった。銃弾が貫いた痕を、容赦なく踏みつける。

「う……ぐあ、っ！」

「外したか」

悔しげに、ユサファはつぶやいた。サンダルを履いた足には吸い終わった紙巻き煙草を踏みつけるように力が込められ、黒づくめの男はさらに呻いた。

「私の銃弾を眉間に受けなかったのは、お前が初めてだ」

ちっと舌打ちしたユサファを、男は見上げた。黒い髪、黒い目。この国では珍しくもない色だが、その肌の色がやや淡い。異国人の血が混ざっているのかもしれない。そう思えば顔立ちも彫りが浅くて、どこの国の血だろうとユサファは考えた。ヨーロッパではない、それではアジアのどこか。こういう仕事を請け負うのは、中国人が多いというのがユサファの知識だが。

「まあ、初めて銃を持ったときは外したがな。よろめいて焦点を失ってな。反動で教官の顎あごを撃ち抜い

た」

そう言うユサファを、男は唇を噛みしめながら見上げた。鋭い目は、もうぎんろい猛禽類のように鋭い。傷口を踏みつけられて痛むだろうに、しかし噛みしめた歯の奥から呻きを洩らすだけで、男は気丈にユサファをにら睨みつけた。

「……殺せ！」

「もちろん、そうするとも」

ユサファは再び、デザートイーグルを構える。銃口はまっすぐ下、踏みつけた黒ずくめの男の眉間に向けられている。

「これで外しては、あのときの教官に申し訳ない。まあ、本物よりもよく似合う人工顎をは埋め込んでやっただから、文句は言わんだろうがな」

トリガー

引き金にかかったユサファの指には、再び強く力が込められた。

◆

ユサファ・ビン・イスマイル・アブド・アルバドル——バドル家の三男の名を知らぬ者は、このアウラール連邦王国においてひとりもないだろう。

油田を主な財源としたこの砂漠の国の、貴重な水源を探し当てて、水の絶えないダムを造っては国民を文字通り潤させた。石油の輸出のみならず、鉦脈を発見しては数々のレアメタルを掘り当て、さまざま先進国に供給する。その益は数字に置き換えることもできない、誰にも想像できないほどの富を得ている、バドル家。

その功績の主たるものは三男のユサファの、鋭く切り立ったヒジャーズ山脈の頂よりも鋭利な頭脳と、世界最高峰の大学の教授に帰国するなどすがられたという噂の知識と学力、そして神憑りかみがか的にまで冴え渡った直感から生まれたものだ。

もちろん、ユサファはそんな自分の功業を口にはしない。三男らしくバドル家本宅からは離れた場所にある、本家に比べるとあまりにも質素な屋敷に住まい、数人の使用人を置くだけで普段は人の出入りも少ない。知らぬ者が見れば、冷や飯食いの三男がおとなしく人目を憚り、慎ましく暮らしているのだ。

と思うだろう。

しかし、このアウラール王国における最大の富豪は誰なのか。王家でさえも、バドル家の威力を無視することはできなかった。そしてこの国の財力を世界的に知らしめたこのたった十年ほどの間——もつとも働いたのは、もうすぐ二十八歳の誕生日を迎えるバドル家の三男、ユサファであることを国民の誰もが知っていた。

しかし、ユサファの顔を知る者はそう何人もいない。その名は国王のそれと同じほどに國中、否世界中に轟き、その名を知らぬ実業家はモグリだと嘲笑われるというのに、その顔は驚くほど知られていなかった。

アデイリヤは——ユサファのように立派な名は持っていない。ただ『アデイリヤ』と呼ばれる、中国だか日本だかの血の混じった彼は、孤児^{ターゲント}だった。捨てられていたのがマフィアの情婦の家の前だったという理由で幼いころから拳銃を仕込まれ、体操選手さながらの体術を仕込まれ、^{ターゲント}標的を殺すことだけを価値観に生かされてきた。

アデイリヤはその境遇に感謝しこそすれ、不満を持ったことなどない。ただ見捨てればいい、混血の赤ん坊。それをこの歳まで生かさせてくれ、そればかりではなく生きるための術まで身につけさせてく

れたのだから。

このたびのアデイリヤの標的は、アウラール王国の——否、世界最上の頭脳。その脳漿をワルサーターゲット PPKの銃弾で撒き散らすことが、与えられた任務だ。ミッション

しかし今、アデイリヤのワルサーは床に転がっている。そしてアデイリヤ自身も床に押し伏せられていた。銃弾に貫かれた肩からは血を流したまま、その上には手が置かれ力が込められ、その痛みにアデイリヤは呻いた。

見下ろしているのは、鋭い黒い瞳の男だ。一度目にしただけで、二度と忘れることのできない猛禽類のような鋭さ。その鋭さは磨かれた宝石のようで、こういう瞳を磨いた黒耀石とでも評するのだろうか。それはまっすぐにアデイリヤに向けていて、憎々しいほどの笑みを浮かべている。

彼の唇は、弧を描いて持ち上がっている。吹き込む風に、ゴトラが揺れる。ゴトラが彼の口もとを隠し、それは婀娜な女が恥じ入って口もとを隠すように目に映った。その視線の鋭さとは裏腹なそんなさまに、アデイリヤは目をしばたたかせる。

「そう脅えるな」

彼は笑った。国民すべてが知っている、バドル家の三男。それでいて、限られた者しか知らないその顔。目の前の顔がそれだというのは、クライアント依頼者から見せられた写りの悪い写真で知っていた。しかし。

「私のデザートイーグルが、二度も狙いを外すとはあり得ない。ということは、お前はまたアンラー神に呼ばれてはいないということなのだろう」

ラー・イラーハ・イツラー・ラーフ、ワ・ムハンマド・ラスール・ツラーフ。そう聖句を唱えて、ユサファはまたにやりと笑う。

アデイリヤが彼に見入ってしまったのは、その鋭い視線、印象的な笑みのゆえばかりではない。あの写真は確かにユサファを写していたはずなのに、受ける印象があまりにも違うのだ。いかに隠し撮りとはいえ、あの写真を撮ったカメラマンはよほどに腕が悪いに違いない。それともアデイリヤに刷り込まれている印象が、よほどに強かったか。

写真のユサファは、どこか物憂げで何を考えているのかわからない、気難しい人間に見えた。ほそおもて細面が長く、顔色の悪いインテリの類の男。一キロ以上もある銃身一四インチのIMDデザートイーグルを片手で易々と扱うなど、あの写真からは想像もできない。むしろペンよりも重いものなどを持ったことなどないような——もちろん、油断したつもりはない。それにしてもユサファは、アデイリヤの想像

を超えた人間だった。ワルサーPPKの銃弾を避けた素早さといい、返す刀でデザートイーグルの銃口を向けてくる素早さといい、あのインテリじみた男から、誰がその力と機敏さを想像するだろうか。

アデイリヤの肩の傷を、拳でぐりぐりと押し潰すようにしながら、ユサフアは言った。

「お前のような男を送ってくるとは、カシム兄上の手だな。まったく兄上は、よくご存じだ」

「何を……知ってるって？」

呻きながら、アデイリヤは言った。それは痛みゆえでもあつたけれど、自分の依頼者の名を的確に言い当てられて驚いたというのものもある。

もつとも、バドル家の次男・カシムたる者が、直接アデイリヤに指示を下したわけではない。ユサフアの顔は写真で知っていたが、アデイリヤはカシムの顔は知らない。カシムはアデイリヤの雇用者である組織にこの仕事を依頼し、その依頼内容からアデイリヤが選ばれたのだ。自分が選ばれた理由を、アデイリヤは知らない。しかしユサフアは、その選択こそが正しかったと言うのだ。

「お前が、私の好みだということだよ」

「な、………に………」

アデイリヤの言葉を最後まで聞かずに、ユサファアの顔が近づいてくる。顔が寄せられる。唇が、重なる。

「ん……、う、んっ！」



ユサファの唇は、その端正な見かけとは裏腹に肉厚だった。包み込んで、押しつけてくる。一瞬それに呼吸を奪われたが、それはユサファの呼吸を押さえ込んで窒息させるなどという殺人術ではなかったらしく、混乱するアディリヤの唇は柔らかさに包まれ、ちろりと入り込んできた舌先に、内側をくすぐられた。

「っあ……っ……」

唇は重なったまま、舌で形をなぞられる。繰り返し執拗に舐められて、上がっていく息は奪われてしまふ。上下の唇で口全体を力を入れて食^はまれ、軽く引つ張られて離されて、再び唇の間に舌を差し入れられて、唇の裏を舐めあげられる。ぺちやり、と唾液の絡み合う力が響いた。

「や、あ……っ！」

思わず顔をあおのける。しかしユサファの片手はアディリヤの肩の傷を、もう片手が顎を掴んで、痛みとその力の強さに呻いても、ユサファは容赦などしない。

「その、苦痛に満ちた顔」

唇が触れ合う近さでそうつぶやいて、再び濡れた部分が触れ合った。柔らかい肉越しに噛むように唇を揉まれ、痛みと薄い皮膚を刺激される感覚に翻弄される間に、痛みが遠のいていったことになかなか

気づくことができなかつた。

「果たして兄上は、こっちのほうも……」

手が、淫猥にアデイリヤの胸に触れた。ゆっくりと動き、レザーの上着に覆われた胸を揉みほぐしていく。そのように固い布越し、感覚が伝わってくるわけではないのに、くちづけだけでアデイリヤの感覚はそれほどに鋭くなってしまうたというのか。それとも、ユサファの手業はそれほどに巧みなのか。

「私好みを見つけてきたのかな。兄上自身で確認なさったか、それとも……」

ユサファの手がすべる。その手はアデイリヤのジャケットのボタンを素早く外し、シャツの裾に入り込んだ。押さえつけるようなくちづけから逃れようと肩を押さえられ、痛みを呻くと唇を噛まれ舌でくすぐられる。そうやって翻弄されるアデイリヤの体はいつの間にかはだけられている。

日々の厳しい訓練で鍛えられた剥きだしの胸には、ユサファの手が這っている。その手の動きはレザー越しのそれよりもはっきりと感じられた。

「な……あ、っ、あー！」

「ここ、感じるか？」

にやり、とユサファが唇の端を持ち上げる。その間にも唇は重なったままで、だからアデイリヤが彼

の笑みを確認できたのは、自分の唇をもてあそぶ彼の口もとがゆるりと持ち上がったからだ。

「か、んじ、る、わけ……………っ……………！」

「女みたいには感じないって、そう思ってるのか？」

ユサファの指が、くるりと動く。アデイリヤの乳首の形をなぞるように動いたのだ。

「ひ……………、っ……………」

「男だって、ちゃんと仕込めばここで感じる。ここだけでだってイけるぞ。お前をそう、仕込んでやるか？」

言いながら、ユサファは尖りをつまんだ。きゅ、と引っ張られて腰の奥がぞくりと疼いた。

「もともと敏感なやつは、いるけどな。開発しなくても、触られただけで勃つやつが」

そんなアデイリヤの反応に、気づいたのか否か。ユサファはさらに強く力を込め、握ねるように転がす。爪を立てないそれはこれほど唇を噛みながらも決して直接歯は立てず、まるで一枚布を隔てたようなもどかしい愛撫しかしてこない彼の口淫と同じだ。

ゆるく、柔らかく与えられる愛撫。まるでアデイリヤの奥に眠る何かを、揺り起こそうとでもいうような焦れたい感覚。

「痛くしてやろうか？」

「な、に……」

もどかしい、と感じたアデイリヤを見抜いたのか。唇を離して、ユサファが微笑んだ。

「ここ、つまんで、ひねって……」

「ひあ、あ！」

「爪、立てて。そうされたほうが感じるか？」

言いざま、彼はアデイリヤの唇に歯を立てた。噛みつかれた薄皮からは血が滲み、アデイリヤの口腔に味が広がる。馴染んだ味だ。それに、アデイリヤの全身を安堵が走る。自分が仕事の場にあること、ターゲット標的のもとにすることが脳裏から消えた。ここは慣れた訓練場で、無意識のうちに手にあるべき拳銃を探り、

握りしめた手が空を掴くんだことにはつとずる。

「ひ……い、あ！」

小さな突起を、つままれた。根もとを抉えくするように爪が立てられる。大きく、アデイリヤの背が跳ねた。ユサファの手が胸を押さえつけて、アデイリヤの反応を抑え込む。そうされることで、体を貫いた感覚はうちにこもり、よけいに歯がゆく身が疼く。

「……ふん」

音を立てて唇を離し、ユサファアが笑う。微笑む彼を見上げたアデイリヤは、また胸の尖りを抓つかられて声をあげた。

「そういう反応は、ますます好みだ」

アデイリヤの耳もとに唇を押し当てながら、ユサファアは言った。

「何だ、兄上は顔だけじゃない、反応も好みを寄越してきたというわけか？」

何を、とのアデイリヤの言葉はくちづけに塞ふさがれた。息がとまるほどに奪さらわれて、そして離れた唇がほくそ笑みながらつぶやく。

「兄上が、お確かめになったわけじゃないだろうな。……こうやって、直接」

「ひあん、んっ！」

尖りのことさらに摘み、執拗にひねり、繰り返し粘つくくこね回す。繰り返されるうちに、その痛みが確実に快感に変じていることに気づかずにはいられない。

(な、んだ……こ、れ……)

戸惑うアデイリヤの背筋に、ちろちろと小さな炎のようにはいずり回るものがある。それが腰部分に

いたって、再びぞくりと走った快感。それを確かに「快感」だと受けとめたアデイリヤは、懸命に首を左右に振った。

「いや、だ……、や、め……」

「この私に、命令か」

唇の端を持ち上げたまま、ユサファは言った。

「お前がそれほどの地位にある者とは知らなかった。この私に命令できるとは、父上か兄上たち……そうでなければ、国王陛下か」

そのいずれにも、畏れを抱いていない口調だ。微笑んだまま、もてあそばれたことで固くそそり勃つた乳首を指の間で強くつままれた。

「う、あ……っ……」

「こんな、乳首をいじっただけで反応する者を寄越してくるとは、やはり兄上は、お前の味見をしたとしか思えん」

それを責めるように、ユサファは尖りを指先で強く弾く。声をあげて、アデイリヤはまた背を仰け反らせた。

「ほら……ここ」

床に押しつけられた状態で、ぐっと顎を押さえつけられる。デザートイーグルを軽々と扱う指先でじつくりと揉みほぐされた尖りは質量を増して色づき、ひねるように根もとを擦られるだけで下半身からぞくぞくと衝動が迫りあがってくる。

「く……う、ん……っ……」

ユサファの両の手は、アデイリヤの乳首をひねり、引っ張り、押し潰してはつまむ。そうやって、そこがじんじんと痺れるくらいに腫れ始め、アデイリヤの声に艶が混じり始めるのと、ユサファの舌が首筋を這うのは同時だった。

熱い舌。彼の細面の顔からは想像できない熱。それが、アデイリヤのうなじを舐め回す。

「や、っ……、……」

逃れようともがくと肩の怪我を押さえられ、痛みに呻くとくすぐったい部分を舐められる。そこから迫り上がる感覚はアデイリヤを悶えさせ、痛みと痺れのような愉悅が混ざって何が何なのかわからなくなる。

声が抑えられない。体を貫く感覚はどんどん深みを増し、耐え難い熱となって体を包み始めている。

咽喉を反らせて、アデイリヤは喘いだ。

ユサファの手が、アデイリヤの腰にかかる。彼は手早くバックルを外し、革のパンツを引き下ろした。片手で下着ごと脱がされ、現れた性器はすでに反応を示している。ユサファは、それを見て楽しげに笑った。

「ちゃんと勃ってるじゃないか」

彼の手は性器を軽く扱じき、するとそれはひくりりとなる。固さを増し、アデイリヤの咽喉のどからは喘うぎがこぼれた。

「もっと洩しらせ。ほら、もうこんなにこぼれてる」

「な、にを………？」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

砂漠の覇者と蜜愛の夜

《立読み版》

発行日 2011年5月20日

著者名 氷高 園子

イラスト 田崎 良虎

発行所 【MILK・CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。